

# 日本語特殊拍生成の難易度 - 韓国人学習者の場合 -

木下直子 (キノシタ ナオコ) naoko-k@meikai.ac.jp

## 1. はじめに

日本語のようなモーラ拍リズムを持たない日本語学習者にとって、日本語の特殊拍は時間制御が難しく、知覚・生成ともに困難であることが指摘されている(助川 1993, 戸田 2003)。

鹿島(2001)は、リズム型により生成の難易度が説明できることを明らかにした。

本研究では鹿島(2001)の結果を踏まえ、韓国在住の韓国人学習者(以下、KS)を対象に行った生成調査結果から日本語特殊拍生成のリズム型別難易度を解明する。

## 2. 調査手順

### 2-1 調査対象者・調査期間

調査協力者は、韓国釜山にある大学の1~2年生(日本語専攻)11名とNS<sup>1</sup>(東京方言話者)5名の計16名である。調査は2005年5月(1年目)と2006年5月(2年目)に行った。NSには2005年12月から2006年1月にかけて調査の協力を得た。

### 2-2 調査語

調査語は5つのリズム型(12型・21型・121型・122型・212型<sup>2</sup>)を考慮した有意味語24語である(別紙参照)。語末の促音は通常の語彙に現れないため、促音の12型・122型・212型は存在しない。語の選択にあたっては、協力者が大学1年の時に必修科目で使用する『NETWORK日本語1』(時事日本語社)を参考にした。

### 2-3 調査方法

キャリアセンテンス「これは~です」に入れ、1文ずつコンピュータ画面に提示した調査語を頭の中で確認した後、2回連続で読み上げてもらい、単一指向性マイク(ECM-MS957)とSONY製DAT録音機(TCD-D100)で録音した。録音は雑音のない静かな環境で1名ずつ行った。2年目も同様の手順でデータを収集した。

## 3. 分析方法

収集した計1296(KS:調査語24語×読み上げ2回×11名×調査2回=1056, NS:調査語24語×読み上げ2回×5名=240)の音声データは、音響分析ソフト(Praat ver. 4.4.34, 2006)を用い、波形とスペクトルグラムから持続時間を計測する。次に、言語リズム類型の分類に用いられるGrabe & Low(2002)の数式でvocalic interval nPVIとintervocalic interval nPVI<sup>3</sup>を求め、KSのnPVI値がNSのnPVI平均値から2標準偏差以内であれば習得したとみなし<sup>4</sup>、習得を「1」、未習得を「0」としてExcelに入力する。ガットマン尺度解説法のC<sub>scal</sub>係数とC<sub>rep</sub>係数でリズム型別に順序性が確認された(C<sub>scal</sub>>.60, C<sub>rep</sub>>.90)場合、含意スケール(imPLICATIONAL scaling)から難易度を明らかにする。

## 4. 結果・考察

C<sub>scal</sub>係数とC<sub>rep</sub>係数を求めた結果、順序性が確認された(1年目 C<sub>scal</sub>=.63, C<sub>rep</sub>=.95, 2年目

$C_{scal}=.92, C_{rep}=.98$  )。その順序は習得者が多かった順に, 1 年目: 12 型・21 型 121 型・212 型 122 型, 2 年目: 12 型 21 型 121 型 122 型 212 型であった。つまり, 3 モーラ 4 モーラ 5 モーラのように, モーラ数が増えると時間制御が困難になり, 習得が遅れると考えられる。それは今回, 調査方法として読み上げ形式を採択したためであろうか。

木下(2007)は本研究と同じ協力者を対象にリズム型別の特殊拍知覚実験を行った。その結果においても, 5 モーラ(122 型・212 型)に比べ 4 モーラ(121 型)の正聴率が 1 年目, 2 年目, とともに高かった。したがって, モーラ数(字数)が増えると習得が遅くなるというのは, 単に読み上げ形式の文字処理による影響だけでは説明がつかない。これは重音節と軽音節の組み合わせが複雑なリズム(121 型, 212 型など)であればあるほど, 情報処理が困難になることが考えられる。今後, 単純なリズム型(22 型・222 型)を含め, モーラ数やリズムの複雑さが及ぼす習得への影響について検討していきたい。

## 5. まとめと今後の課題

KS を対象に 2 度にわたり行った日本語特殊拍生成調査により, 3 モーラ 4 モーラ 5 モーラの順に難しく, 習得が遅くなるということが明らかになった。今後はリズム型の単純な語, 文, 自然会話などを分析対象とし, KS のリズム習得過程を解明していきたい。

注 1. NS のデータは, KS が生成した語が習得したかどうかを決める基準として用いる。

2. リズム型は, 重音節((C)V+特殊音, または(C)V(C)V)を「2」, 軽音節((C)V)を「1」とし, その組み合わせを表したものである。例:「ビール」「切手」は 21 型, 「昨日」「写真」は 12 型となる。
3. 母音長・母音間長別に, 先行音と後続音の持続時間の差の平均値のことである。
4. Neufeld(1977)で母語話者の平均から 2 標準偏差以内のばらつきであればネイティブレベルであるという基準を設けており, その基準に従った。

## 参考文献

- 鹿島央(2001)『日本語発音教育への応用をめざした新しいリズム単位の音声的実現に関する基礎研究』平成 9 年度～平成 12 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書。
- 木下直子(2007)「韓国人日本語学習者の日本語習得過程 - 長音知覚の場合 - 」韓国日本学会第 74 回学術大会, 2007 年 2 月 10 日, 建国大学校。
- 助川泰彦(1993)「母語別に見た発音の傾向 - アンケート調査の結果から」『日本語音声と日本語教育』文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」, 187-222。
- 戸田貴子(2003)「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7-2, 70-83, 日本音声学会。
- Neufeld, G. (1977) Language learning ability in adults: A study on the acquisition of prosodic and articulatory features, *Working Papers in Bilingualism*, 12, 46-60.